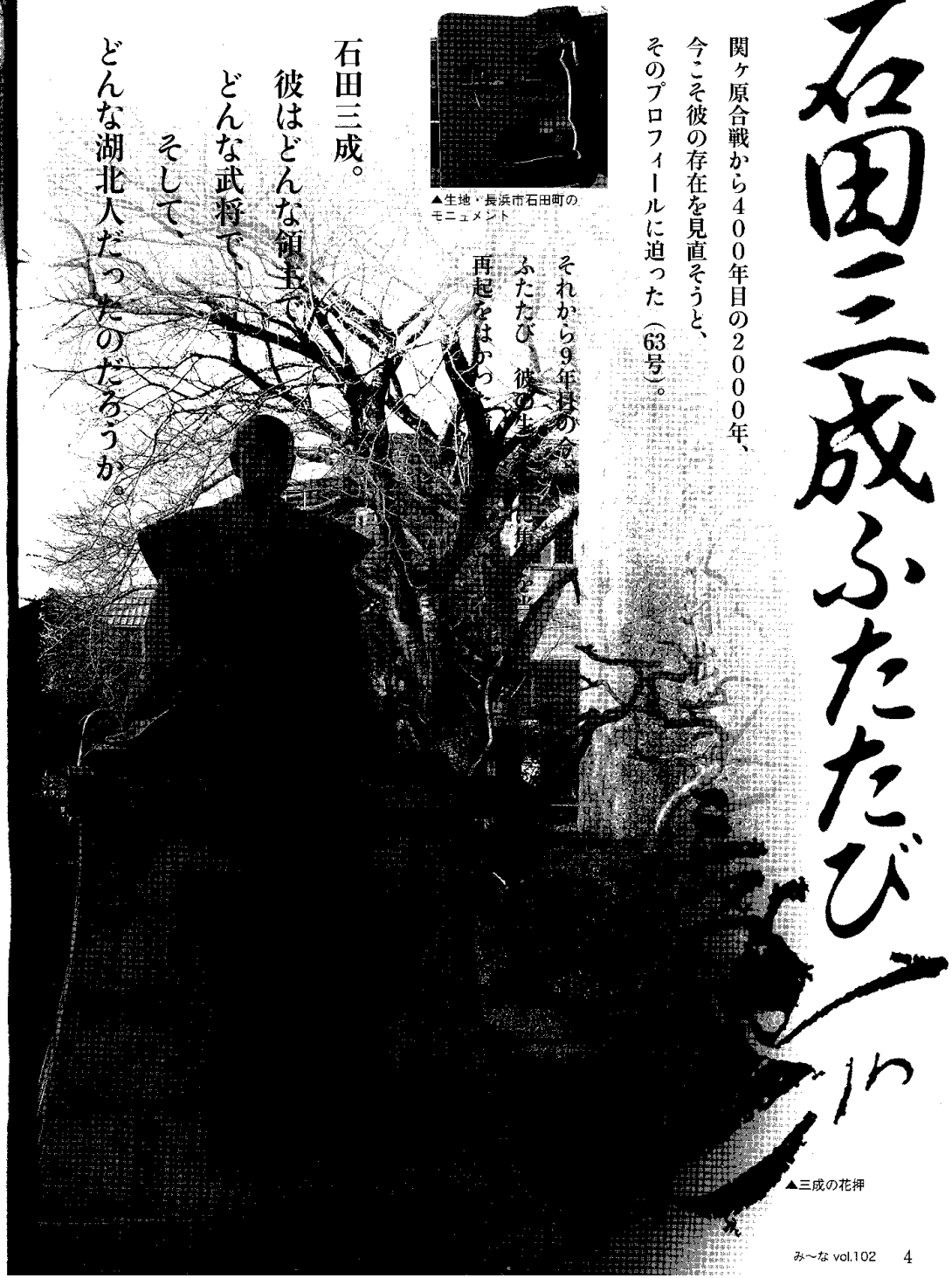
石田三成ふたたび

関ヶ原合戦から400年目の2000年、今こそ彼の存在を見直そうと、そのプロフィールに迫った（63号）。

▲生地・長浜市石田町のモニュメント

石田三成。
彼はどんな領主で、
どんな武将で、
そして、
どんな湖北人だったのだろうか。

それから9年目の今、ふたたび、彼の生涯に焦点を当て、再起をはかった。

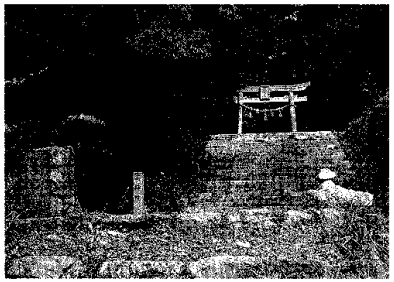


▲三成の花押

石田三成の生涯と業績

太田 浩司　長浜市長浜城歴史博物館 学芸員

幼少時代に出仕していたとされる「ある寺」のひとつ、観音寺（米原市朝日）の門前▶



▲木之本町古橋の法華寺三珠院も「ある寺」といわれる

▲石田三成の生地、長浜市石田町。バス停のあるこの付近も屋敷跡といわれる

出生と若年期

石田三成は、永禄3年（1560）に坂田郡石田村（長浜市石田町）に生まれた。その父・正継は戦国大名浅井氏の家臣で、石田家は石田村の地侍の家系であった。その幼少時代、「ある寺」に小僧に出されていたと、『志士清談』や『武将感状記』は説く。この「ある寺」での「三献の茶」が秀吉への仕官の「きっかけ」となった話は有名だ。だが、その「ある寺」の場所については、坂田郡大原庄観音寺（米原市朝日）と、伊香郡己高山法華寺三珠院（木之本町古橋）の2説があり、どちらとも決しがたい。三成が秀吉に見出されたこの逸話が事実とすれば、秀吉が長浜城主となった天正2年（1574）以降のことで、三成15歳の頃である。

三成の秀吉家臣としての活躍が、史上に登場するのは天正11年（1583）、三成24歳の賤ヶ岳合戦直前からだ。同年正月23日付けの三也（成）書状（広田文書）は、「本能寺の変」後の混乱に際して、秀吉側として戦った淡路国の地侍・広田蔵丞の戦功を賞した内容である。これは、現在知られる最も古い三成文書だが、三成が最初「三也」と名乗っていたことが分かる。その直後の2月7日には、敵対する柴田勝家を攪乱するために、越中へ攻め込むべきことなどを説いた、越後の上杉氏宛覚書（別本歴代古案）が残っている。この文書で三成は、「石田左吉」と署名している。「三也」から「三成」に実名を変えるのは賤ヶ岳合戦の直後、「左（佐）吉」の通称に代えて、「治部小輔」の官途を得るのは、天正13年（1585）7月、三成26歳のことである。

秀吉奉行としての活躍

この「治部少輔」の官途を得た頃から、三成は内政的には豊臣政権の「奉行」として、また外交的には全国の大名と豊臣政権をつなぐ「取次」として活躍していく。「奉行」としては、検地・刀狩・人掃令（戸口調査）を全国に及ぼし、当時の日本の生産高や人口を正確に把握、農村の武装解除を積極的に行っていった。三成が登場する最も古い検地帳は、天正12年（1584）11月27日の年紀がある「近江国蒲生郡今在家村検地帳」で、6人の検地奉行の一人として、25歳であった「石田左吉」の名が見えている。今在家村は、現在の東近江市（旧八日市市）今崎町にあたる。

天正15年（1587）、28歳の三成は島津氏攻めに従軍する。彼は、前年から島津氏を担当する豊臣政権の「取次」として奔走、そ

関ケ原から古橋までの7日間

伊吹山の南麓から姉川上流を経て古橋へ

――高木 清さん（関ケ原町）に聞く

鎧を脱いで笹尾山の陣地をあとに

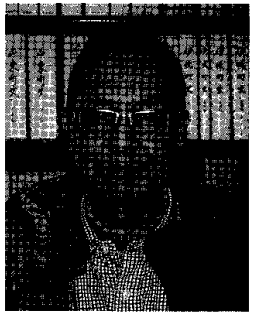
慶長5年（1600）9月15日の午後、関ケ原の戦いは小早川秀秋の寝返りで西軍の敗色濃厚となった。戦いの火ぶたを切ったのが朝8時頃。すでに6時間が経ち、午後2時に近かった。三成は東軍の先鋒がジワジワと迫ってくるのを、笹尾山の陣地から見下ろしていた。

「ウーン、戦いはもはやこれまでか。しかし、なんとか大坂へ戻って家康を迎え撃とう」

そう決断した。となれば、一刻の猶予もできない。あとは宿老の嶋左近に託すことに。そして、近習とともに鎧を脱いで百姓姿に身を変えると、笹尾山の陣地をあとにした。

さて、問題は笹尾山からどんなルートを取って、大坂までたどり着くかだ。西へ逃げて、中山道を南へ向かうのがいちばん近いが、すぐに東軍の追っ手に見つかってしまう。東や南は論外。ならば北しかない。そう考えて湖北へ逃れるのだが、関ケ原から捕らえられることになる古橋村（木之本町古橋）まではどんな経路を取ったのか。

そのあたりに詳しい人をタウン誌『西美濃わが街』の編集部に尋ねると、関ケ原町に住む高木清さん（60歳）を紹介してくださった。高木さんは合戦場のど真ん中、東軍の黒田長政と竹中重門が陣した丸山の麓にお住まいだ。



▲三成の研究を続ける高木清さん

玉から伊吹山麓を西の藤川方面へ

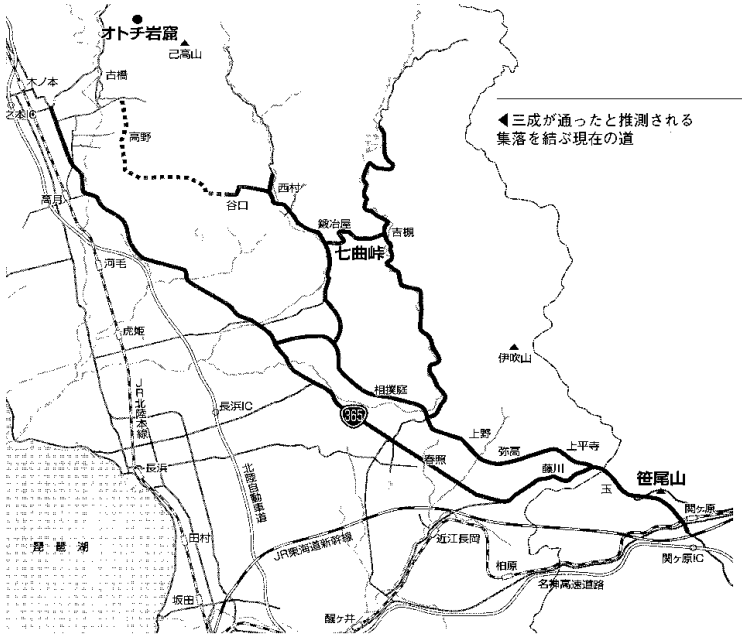
「敗軍の武将が好きなんですよ。負けた方の記録はほとんどないでしょう。だからおもしろい。三成の敗走路もいろいろ調べましたが、わからんところもあります」

田根村の谷口（長浜市谷口町）には、三成が古橋へ逃れる途中に立ち寄ったという伝承があるが、そこまでの経路が謎だ。

「笹尾山の北に小高い山があるでしょう。21号バイパスのトンネルが通っている山ね。そこを越えると、玉の集落に出ます。そこから北の山へ入って春日村（揖斐川町春日）方面に行くか、西の藤川（米原市藤川）方面かですが、やっぱり藤川でしょうね」

ちなみに作家の徳永真一郎は、春日村から坂内村（揖斐川町坂内）を通り、金糞岳の南の鳥越峠を越え、草野谷を経て古橋へというルートを『別冊歴史読本石田三成』に書いているが、あらためて地図で見るとたいへんな距離だ。日程を考えると、合戦翌日の9月16日夜には、谷口の庄屋宅にたどり着いているはず。おそらく一昼夜歩き続けても、鳥越峠までも行けない。距離がありすぎるのだ。さらに、小西行長が竹中重門に捕まったのが春日村だ。西軍の主要な武将がともに同じ逃走ルートを取るとは思えない。

▲関ケ原合戦の決戦地



◀三成が通ったと推測される集落を結ぶ現在の道

大清水・弥高・上野の山裾を歩く

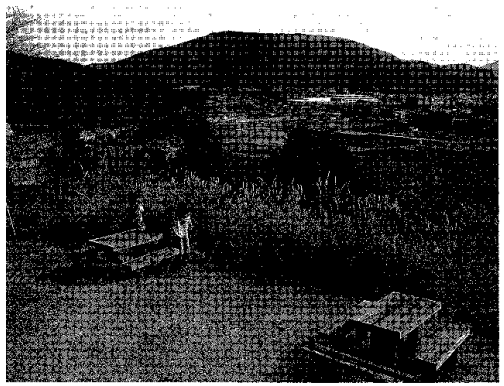
北国脇往還は、美濃の西端にあたる玉の集落から、近江に入って藤川、寺林、大清水、春照へと続く。現在、自動車で玉の集落から滋賀県に入ると、道は2本に分かれる。西の長浜方面に向かう国道365号と、北の草野谷につながる広域農道だ。北国脇往還は、ちょどその間にあり、北東へ延びている。

街道はまず行かんでしょうから、伊吹山の裾を通ったんでしょうね」

ということは、現在の広域農道に沿ったありを北上したわけだ。藤川の出郷にあたる林の北に、京極氏の館があった上平寺の集落がある。ここら辺りは見つかりやすい。

「上平寺のあたりの北国脇往還は、時代によってルートが変わっているようですね。三成が逃げた当時、どのルートを通っていたかわかりませんが…」

大清水の北には弥高の集落があり、春照の北には上野の集落がある。その間のあぜ道や山裾を歩いたのかもしれない。関ケ原から春照までは約12㎞。平地を歩いて3時間ほどだ。その倍として5、6時間が経っている。固まって歩くとひと目につくから、離れて歩いたに違いない。必死で駆け抜けてきた三成らの一行は、気がつくと4人になっていた。三成と磯野平三郎、渡辺勘平、塩野清助の4人だ。とっぷりと日も暮れた。ここらで休憩を入れたいところだ。



◀三成が本陣を張った笹尾山から合戦場を望む

七曲峠を越え黒坂峠を越えて谷口へ

「春照に三成の伝承があるんです。本陣脇に、焼け焦げた庭石がありましてね。その石が、三成を匿った罪で家を焼かれたときのものだというんです」

本陣跡は、いまは広場になっている。焼け焦げたという庭石を探したが、それらしい石は見つからなかった。

「本陣は春照宿のど真ん中でしょ。街道を歩いたとは思えません。合戦の前に、三成に味方したから焼かれたんじゃないですかね」

さて、春照を過ぎると、脇往還はやがて姉川を渡り、浅井郡に入って相撲庭、今荘、野